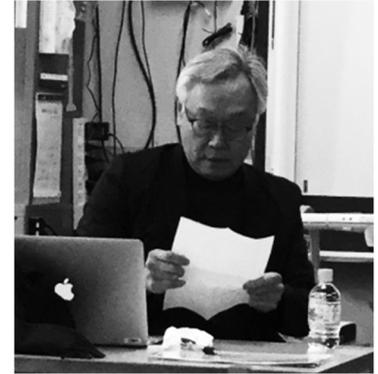


「体育授業における学習課題は どのように子どもたちの学習活動の対象となり、 共有されていくのか」

報告：辻内俊哉（編集部）

今回のおもしろ体育スクールは、もともと5月にあった中間研究集会で山本敦子先生が行った小学校2年生のフラッグフットボール実践の公開授業がベースになっています。その実践に興味を持った森先生（武蔵野美術大学）が「ぜひ、授業の分析をさせて欲しい」ということで、市内ブロックと共同研究のような形でやり取りしてきたそうで、その成果をスポーツ教育学会で森さんが報告されたそうです。今回はその報告会でしたが、市内ブロックと言えば「グループ学習」研究の老舗です。「グループ学習」研究に視点を当てた例会ということで、久しぶりの中川孝子さんや愛知から近藤ひづるさん、そして、研究報告をしてくれた森敏生さんと全国大会並みの顔ぶれでしたが、参加者は13人（大阪はおっちゃんばかり）でした。



2. 授業の分析をどうするのか

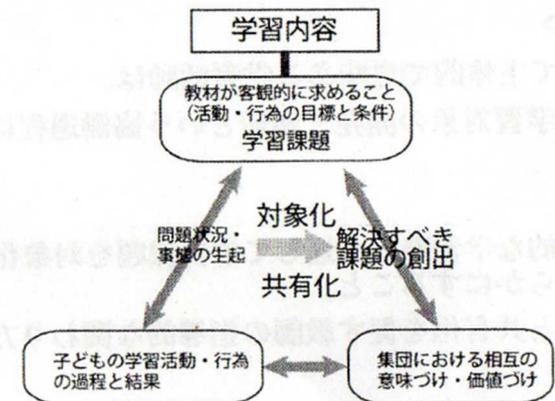
森先生はまず、体育の学びが創り出されるプロセスすなわち、子どもたちは体育の授業で「何を対象にどのようにまなんでいくのか」という点について具体的検討が必要と述べていました(右図)。

そう言われると、体の動きなんか後に残らないし、作戦を立ててボールゲームをやっても相手の動きも毎回同じではなく、意外と体育の授業は学習が対象化、共有化されにくい教科です。

そういう視点で山本実践を見つめ直したとき、小学校2年生の子どもたちはフラッグフットボールの攻めの時「ピンチ」という言葉で、相手のディフェンスが進行方向を塞いでいることは認識で来ていても「切り返し」という学習課題にたどり着かなかったことを森さんは指摘します。じつは体育の授業ではそんな場面がいっぱいあるのだと。

実践はその後、ドラゴン（防御）に行く方向をあらかじめ知らせて、ピンチの状況をあえて作り出しながら「切り返し(ex: 右に行くふりをして防御を引きつけ、広く空いた左側スペースをタイミングよく抜けていく)」を学習課題にしていきます。でも、学ぶ対象のプレーが出現しないこともあり、こういうことが体育の授業では確かによくあります。

学習課題の対象化と共有化の概念モデル



森さんの当日資料より



実際に子どもたちが、どういう記述をグループノートに書き、誰が誰にどのようにアドバイスしたか、そして、そのプレーの成否を VTR も含め全部照らし合わせ、分析した森さんもすごいのですが、全部のデータをきちんと整理していた山本敦子さんもすごいです。「すべての子どものわかる・できる」を保障するためのプロ意識を感じました。

小2の子どもの実態も話題になりました。成長盛りのこの時期は失敗も多く、新しいことをしたら、前のことをすぐ忘れてしまうことも多いです。山本先生は考え方の原則を見つけ共有していくことを大事にしていますが、特にフラッグフットボールでは敵味方の位置関係（距離感）が一番大事ではないかと言っていました。また、何事にも熱中しやすい年齢でもあるので、教師の教えたことと子どもが学びたいことが一致すればいいのですが、全然ずれていることも多いそうで、子どもの学びたいことをどうやってつかみ取るかという点も課題として挙がりました。

最後に中川さんが「グループ学習を中核にして研究していても、討議の半分はその教材の技術面に話が向かってしまう。最終的に技術の話は盛り上がるが、グループ学習の話は何をしたらその話になるのかがわからない」と切り出した後、続けて「教師の提示、子どもの受け止め、理解したことをどう実現したか、そして、グループで課題を共有し、新たな高まり事実の受け止め、次の課題を見つけていったか、そんなことを話し合うのがグループ学習の話し合いだと今日分かった。」とまとめてくれました。



参加者の感想から

☆グループ学習のことをじっくり考察するのはとてもしんどくて、今まで(今も)避けてきたのですが、子どもたちの思考と教材がどう結びついていたのかを知るには、そこを考察しないと意味がないんだろうなと、...

子どもに提示する課題が(全員で共有するものになるまでには数時間かかる)「揃っていないくて当たり前」と言うことを確認できた事は、とても安心というかほっとしました。(古川宗治)

☆グループ学習研究の内容方法を示してもらえたなあと思いました。

○教師が学習課題をどう選び、どう提示したか。

○児童がそれをどう受けとめ、理解し、メンバーと共有していったか。

実技でどう課題に挑み解決しようとしたか。 etc。

○そして、その様子(感想文 etc)を教師がどう受け止め、自分の教材解釈や学習課題を広げていったか。

等々ー！若者たちががんばってくれたまえ。「忙しい」のはいつの世もあって普通のこと。それでも「知りたい」「探りたい」が上回ることで授業研究が続けられるんだと思う。(中川孝子)